



上川井だより

10月号

平成29年 9月28日
横浜市立上川井小学校
校長 山田 アイ子

「自分のまちや学校に 愛着がもてる子どもに」

副校長 山本 美和

9月24日（日）、陸前高田市で行われた「平成29年度たかたのゆめ稲刈り式」に参加してきました。私が、陸前高田市と関わるようになったのは、平成26年に前任校で5年生の担任をしていた時に、ある児童が家庭学習で「たかたのゆめ」の発祥水田で行われた「たかたのゆめ田植え式」の新聞記事を取り上げたことがきっかけです。「たかたのゆめ」とは、平成24年に復興支援を目的にJT磐田から委託された新種の稲です。今でこそ、多くの農家が栽培している稲ですが、当時は震災直後の厳しい環境の中で、苦労を重ねて生まれた稲だそうです。

「被災地で米作りができるのか」という子どもたちの疑問が、家庭学習から社会科の稲作の学習に繋がりました。最初に生産を始めた方や、陸前高田市役所の方にご協力頂くようになり、子どもたちと関係者の方々との交流へと広がっていきました。

あれから3年がたっても、私が陸前高田に関わっているのは、陸前高田の皆さんのふるさとを愛する気持ちに魅かれていたからです。それは、最初に「たかたのゆめ」を作り始めた生産者の方の「『たかたのゆめ』が陸前高田の農業の将来につながる米になってほしい」という情熱が、周りの人に広がり、市の農業の中心的存在となっている姿や、市の農政課の方々が、震災で多くの仲間を失った悲しみを乗り越えて、復興支援米「たかたのゆめ」の生産拡大とPRに奔走されている姿から感じています。微力ながら、少しでもお力になればという自分が、人口の4分の1を失った中でも、毎年復興へと力強く歩み続け、ふるさとを元気に笑顔にしようと、まちが一つになっている陸前高田市の姿に、逆にいつも元気を頂いています。

上川井のまちでも、夏休みから9月にかけて多くの地域行事に参加させていただいたり、そこでお話を伺ったりする中で、地域の皆さんがまちを大事にされている思いが、ひしひしと伝わってきました。また、上川井小学校を大事にされていることも、常日頃から感じています。

9月17日（日）の敬老会でのことです。出席者のお一人から、1～4年生までの上川井分校で過ごした後、5年生からいよいよ都岡小学校に行く日が近づいた時に、当時の上川井分校の校長先生から「〇〇（ご自分のこと）の絵はとても上手だから、都岡小学校に飾ってもらうように都岡小の校長先生に頼んでおいたから」と言われて嬉しかったというお話を伺いました。当時の分校の校長先生にとっては、4年生が分校の最高学年であったため、卒業生を送り出すようなお気持ちだったのではないかと推察しました。また、都岡小学校に行くと、分校出身の子どもたちが肩身の狭い思いをしないようにという、思いやりも感じられました。事実、都岡小学校の子どもたちに「〇〇さんは、絵がうまいな」と褒められたと、大切な学校の思い出を笑顔でお話してくださいました。

本校の子どもたちも、上川井のまちを愛し、また上川井小学校を大切にできる人となれるよう、引き続き支援していきたいと思っております。